



沈
潜
白眼
ノ
巻
ノ
目
次

中村俊定文庫
文庫 18
120



東甌蒼輟士佛仙者是歲出浪華而飛錫嶮路
難海煉吟名山古跡招佳賓催雅會而成一眉
所謂行脚弟二之昏也野衲豈不風雅輩一日
為茶話之交輟也圖自形而乞贊聊不碎而啗
鬼錘曰

禿髮似續蓬

形容如翮鴻

一囊紅葉杖

憑屣仰俳風

元錄五竟集綠縵節日

長安梅阜頭陀湛徹人具竹

國々連象

近江

日野 十三吟

中野

五吟

彦根 四吟

柏原

江水

水口 七吟

羨濃

抗瀬川 芦木 榎

尾張

二三才

奈古屋 且荷今 成菌

三河



近江

三月十一日

日晷 鐘明真行

轍士



盛なる花見捨しを京土産

蜂の巣むしる草くの軒

春雨の晴に園の籠提て

飛越水の月板ひけり

漸寒き夜半近かせく車かし

柚字了小屋に吠了おく犬

鐘明

白貴

重好

蜻蛾

桃水

No. 2

吉田 十二吟

小坂井

八吟

新城 十七吟

鳳來寺

心龜的吟

國府 梅可

御馬

五吟

御油 泥蓮子

伊勢

山田 一有 蘭女

又四人

三吟

(大東京文具チエーン特製)

今足コヤコヤな恋はあしえ
 御油の女にとりかへ悔しおはこ入
 旅の眠りを馬士にしかりれ
 水滸にま音ひいかすは何魚かれ
 月冷しき権現の森
 枝栗の片荷に笠を折かたげ
 鹿と病起ん足の乗もの
 己の目を足了玉章に穢れたる
 けやるほと猫うす郭位
 いろはより器用な者とほやされ
 好

柳 奉 毒 福 室 蛾 水 貴

け松は幾代の哥によすれたる
 鏡鑄る夫の鏡捧くる
 死はとて恨の国の水飲じ
 あした夕を炊く釣掉
 猫たぐぬ五月う月ころの月
 枕にのせて香の音よき
 結母の哭ひ息足る事と有
 煤はらふ日の人の出立
 心さし餘るハ鉢と通さる
 あふなりもなく銀を借す
 士 明 狢筆 漢室 千峯 柳水 兎水 白毒 紫堂 祇福

(大東京文具チエーン特製)

うるまひ着る寐まきの服も召あろし
 縁は凡雅の徳にこそよれ
 寤杖もちぶぬよし聖や姨捨や
 蟻のすすみに人を足くびり
 市の家も心の埒に庵なし
 牙がる、星の十筋十筋
 磯つたい何哉ら足の裏いたく
 若衆まつ間をあし 若芝
 花の昼おもひせかせむ空軒
 東風に吹ちる袖のふ急焼

士
 溪
 賁
 明
 娥
 好
 福
 桃
 毒
 蘭

(大東京文具チエーン特製)

日珥信樂院は往昔蒲生國公の
 御靈所又宗祇程乞して當時
 にて千句真行あり
 春中葉冬の梅さく深山哉
 かゝる例もあれはせめて世上凡
 軀の詭諧うかゝはるのよし殊勝に
 有かたく覺えて
 いさ共に拾はんものをはれ毒
 同列中野芦葉に引とめられ

芦葉
 士

語るを馬に送らん花の人

羽のほへたを見しやれ田胤

春の雨けふもかたくくく召れり

片頬刺らぬ髪を笑はれ

名月はいつれ月夜と覺之たり

喰筈にして芋を煮て喰

同列彦根勇士花実軒不障

館にこよひの雨にと催されて

目ざましや首とる春の物がたり

茶のはるころよぬけし古茶の香

轍士

文変

晴嵐

栄士

随車

不障

轍士

不障

（大東京文具チエーン特製）

續く江を蛙の舌に鳴合て

大きな星は皆黄色く

三月月のすかりに年の世を様し

萩折はみて錫に香淺

笛吹て鹿呼者に物とらせ

隣かあれは預け置庵

傘を借しけり天の橋たてへ

忘れられふがさし捨の水

田の草をほうりつけしも思ひから

何喰虫と蚋ハトの名を問

花薪

雲測

雨琴ハコ

筆

障

者也

測

士

也

薪

屈通利とや狂たし事さやと馬上

士シ

月にまけけり皮うすの人

琴シ

乞食と見れば葉山子に五器持せ

薪シ

食 焙りて酔まてか酔

障シ

押花の花嗜むもたまか也

琴シ

春の祭に鳴んたいに般

洲シ

名 呼込て翺ル 弥生のかなめ入

障シ

一くせ有とえゆる黒犬

也

永平寺積ヒツクもつりす百紙ふ

洲シ

よいつ加減は暮顔起の汁

(大東家文具子エーン特製)

高欄のもたれ所のうちくほい

也

泪くうへて泣かなき虫

新シ

必よ突そこなふな灰の占

士

齒黒カをもらひにいつも来る人

琴シ

乗合の船に落あふ首途カシマダチ

新シ

廁を覗く月の明方

障シ

竈馬の鬚をやかれて飛にけり

也シ

聖灵たちの着袷に行

洲シ

朝腹の吐はしまぬ橋の上

障シ

我かほとに荷ふ青虫の

琴シ

あたりよりミ左賢人と云ふされ
夏冬かはる天窓つきこ
花見して其日詠るか又花見
のほるをまちて波人着鮎

例 士 也 新

孟夏廿日伊勢より京へ出るの時

引とめらるる時節前後なれと 同し

思ならむ爰に加入水口極楽寺

にて真行

(大東京文具チエーン特製)

法師の暮て杖を引音	あり磯の波につかれは哥もなし	肉に替たる里の松茸	長き夜と鬼の面近出しけり	月は扇に古からて秋	圓と名を残す自惚の力石	駕籠おろしたる峯の四阿を	酒しるし雨一日の気を治て	よしはらう葎 森と木藪と木	櫻世はうてなよ沼のかきつはた
庵	筆	武鳥	芦蝶	烏白	卯杏	通茂	芥舟	轍士	寸庵

同	水	臂	双	衛	君	蓮	去	知	あ
し	仙	は	ひ	士	か	を	年	り	け
神	の	氷	ゐ	の	来	な	よ	て	ほ
に	瘦	柱	る	思	は	く	り	袂	の
て	た	の	ね	ひ	か	さ	は	に	、
鳥	る	せ	く	よ	う	さ	鳥	花	に
井	里	あ	ら	琴	取	さ	帽	如	来
ち	や	る	の	の	付	と	さ	の	の
い	世	托	鳥	燃	て	下	と	子	照
さ	の	鉢	中	さ	し	地	と	の	る
き	歎	(歎)	よ	し	や	を	刺	姿	姿
			か	り	く	下	下		
			る	泣	り	て	て		
蝶	白	舟	茂	庵	士	鳥	蝶	否	舟
			シ						
			シ						

蕎	踏	宮	う	く	け	纏	ほ	野	得
麦	分	女	た	す	温	さ	と	上	よ
湯	る	孕	、	め	泉	す	、	に	ま
を	占	い	ね	を	に	人	き	恋	ね
焼	か	て	の	す	斗	し	す	の	は
て	破	袂	中	ぐ	擧	ら	壺	し	文
う	産	を	に	に	預	ぬ	に	ほ	を
す	の	か	五	筋	て	ぬ	な	み	お
手	露	な	尺	に	飛	ぬ	ま	む	さ
労	時	し	ハ	や	ま	ぬ	り	三	へ
る	雨	む	の	り	は	ぬ	の	年	て
			ほ	け	り	ぬ	な		見
			る	り	り	ぬ	ま		た
			月			ぬ	り		計
						ぬ	の		
						ぬ	な		
						ぬ	き		
						ぬ	物		
						ぬ	よ		
						ぬ			
						ぬ			
白	庵	否	鳥	士	白	蝶	茂	舟	士
	ハ								シ
	ハ								セ
	ハ								ウ

大東文具チエーン特製

のりものゝ女齒黒のうつくしく

契くちしと梓よせたか

幾秋を朔日毎の影の膳

我に色する軒の竈馬

麓川長明去て月流水

昏るゝ所に傘を借りけり

腥き門の中より降鈕レ

口にまかせて麦囉ひため

足利の伯父の肩あし似と扇歌

一足つなく馬の爪うつ

舌

士

鳥

茂

庵しな

舌

舟

白

蝶

庵

(大坂京文具子エーソ特製)

見ぬ顔て先初花を見てとらん

日のめいたく春雨の間

賭的は弥生の糸に木魂して

拾ふて戻る鹿のもろ角

三月廿四日彦城を立出る雲列

手をとりて見送相原流木堂

江水かたに一宿

散る花に猶すさましや旅姿

起せば起る永き日の夢

士

舌

鳥

茂

例

堂

宿

江水

轍

士

春雨の降う速やむしくりて

全
士

また一目のまけ暮えけり

水

其弓を十五追見たし三かの月

全

とんと落たら吸物に

士

猶餘波をおしきて雲江打つれ

近江路も爰を限りなりとて

寐ものかたりの一軒茶屋にて

又盃取かいて泣く

今ハの厂やれ江水よ雲例よ

士
雪例

五山の川よすべりやるなやあ

(大東家文具手エーシ特製)

徳利をうち碎ひては花もなし

江水

美濃

三月廿一日 杭瀬川白檜下木因尋て

是を休

永き日や味にやつれし旅の形

木因

花の奇麗を塗すふつか

轍士

若鮎のほそき命を醋に浸て

芦本

光澤と白き毛肺えけり

因

今ちからお水にくれたる五百石

酒麩の櫃かの高き月かけ

ウ 夜念佛の鐘木はやめし秋の風

露の哀や一門の水

うなたれし小荷駄引込藪の中

木賃こきりて蚊に喰水たり

呼まけて隣に契る口惜さ

人のこはかるほとこの面瘰

白川の豆腐あちなき物かたり

あつさ忘れて蚤すへにりり

士

東

因

士

李

因

士

本

因

士

士

(大東京文具子エーン特製)

熨豆を書物にうけてほらつかせ

道にあぐまぬ轍殿之

士 本

尾張

三月廿四日熟田の森に

子規を聞

春軽し誰に問へも郭公

同廿五日檀木堂荷今真行

荷今

陀袋の木の芽出せよ酒吞

今一すれと好むあさ漬	馬駕籠の曇り足かけて高はるか	野はしよんくとかる萱の中	有明やまた明なかう走らん	神樂の過るあとの袂風	大名の首途ニ三里花やかに	野水越人或は他玉に有或ハ	障りて不逢かれん	よがらす畧吟にてうち止め
今	士	今	菊	菊	今	士		

恋一すの積りて寐汗出る元	夫の留主の物を寂しき	水かけて跡かう臭る生鱒	世を見かきりて鬚刺に来る	朝露の野菊も萩もあらぬまに	稻外行を追落すらん	昔くに擢を午傳ふ月の舟	只かるくと足ゆるえけり	山賊に雉うたせいと	我れあら野にかけ廻る春
今	士	今	菊	菊	今	士	成菊	且菊	轍士

(大東京文具チエーン特製)

あけ句もしたと覺て日記に
とめねは全て繼にも

及はす

三河

晩春廿八日吉田菽下堂

豊水待がねたりのよし

轍士

うつ、なや抱れて下りし春の駒

豊水

心のたけよあの独法の尺

二徳

物音もせず茶臼挽え

孝父

朧共おのれ忘れて月の前

一可

中産愚かに踊見に行

如沢

書さしの文に名たつる秋つらし

独静

乳母は情をおしへさりしを

相元

幾たひもうたる、杖を恋に替

素月

あがて指折る盃の負

池舟

こと葉迄遠ひめの有京田舎

意仙

雨に一夜を明す船宿

滝月

煙にし句ひのたけき焼鯉

泉祐

法	背	水	色	見	む	ほ	布	終	地
談	合	床	の	る	か	た	子	に	震
の	せ	に	か	月	し	く	綿	出	に
半	て	拾	は	は	を	と	を	ぬ	響
は	眠	へ	ら	的	か	茶	つ	足	か
寺	る	る	ぬ	場	た	を	く	た	す
の	駕	推	神	の	か	ふ	る	か	風
静	籠	を	木	月	け	り	小	蚊	鈴
ま	か	預	の	に	り	習	造	の	の
り	き	置	松	あ	友	ふ		足	音
し				り	た	元		は	
				り		男		や	
								に	
可	元	静	沢	徳	祐	士	仙	白	月
							士		
							子		

守	お	た	無	遠	妹	盲	常	豊	覆
り	も	は	理	處	煮	て	聞	か	を
佛	ひ	は	に	着	て	は	虫	也	お
旅	出	過	誼	象	く	過	の	二	ろ
の	さ	つ	を	つ	れ	る	出	百	す
寐	る	る	合	れ	し	春	撰	十	蘭
覚	、	る	す	た	蕨	の	ミ	日	の
に	父	た	小	る	和	花	合	の	やし
拜	母	船	鼓	の	ら	も		く	な
ミ	の	中			が	見		水	む
け	恩					す		の	
り								月	
元	静	舟	可	文	徳	沢	士	水	筆

（大東京文具チエーン特製）

あかふの山に雉の二こゑ

水

花の匂を筆にまかせて云送水

月

風定つて日の長閑く

舟

同廿九日同列小坂井禅林

光明寺にまわかれ

轍士

繕うはて木なりに藤の盛哉

その氣を残せ月の朧夜

膏車

呑酒を半分雉にふるまいて

御川

荷馬の遅き市の歸るす

吟松

(大東京文具子エーシヤ特製)

かそふるに跡から崩す川の石

万水

明日は今日も黒毛の杲

一滴

寝^り過して関は越^(越)れし箱根山

千釣

古き扇に哥書にけり

可水

庭さむて踊の餘波惜かりし

雪好

立なから喰秋の水漬

筆

肌寒き今も裸に丸ふとり

車

殿の機嫌の月の夕は之

士

蛤^{カイ}あはせ最負せしれて恥かしき

松

いはけなきたり縁を定むる

水

坂を下りよあふつけの笠
 うち多(重ね)いくつ着たのも唐袖に
 朝眼の明も鶏好から
 草の葉を便に鳴し出の色
 たれ禪定門と拝む月影
 茂りなき池に涼みの捨草履
 端を見せたる鎖かたひら
 妙薬を家へに傳へて世の便木
 捨りよこして文の黒なき
 しのみ路やまた行先の遠からん
 滴 好 可 車 水 松 士 滴 鈎

今撞出すは何院の鐘
 はたくと帆柱たたく山嵐
 猿ぬる雪の神社
 道の記をさすか松にふ問れまし
 鋤をまくらに大削かく
 啼名のほり又鳴下る夕鷓(鷓鴣)
 雨のあかりて顔長閑え
 陣小屋をたいて歸る花心
 莖うち松杉ふ木佛の袖
 度猫を朝日に向て飼育
 滴 川 可 鈎 好 水 車 川 滴

（大東京文具チエーン特製）

そこくに見所おほき花の滝
風にながる、蝶の一筋

好川
コトナ

四月朔日鳳来寺に心さす
大木の原に足より地する
はかりの小たけなる馬に
うちのりひとつ脱て鞍つ
ほにうち敷はねふさこた
之かたく道も見わかす誰
か家にか入らん寝人白雪
か門にのりとむ

(大東京文具チエーン特製)

轍士

流氷来る棚田の水を結ひたり	桃鯉
きせる空しく歸る穢多の火	雪丸
節高に生たつ藪の一かま	車文
赤鱗賣る色の重く水	以之
秋のく水硯の蓋を書塗し	桃後
枕をゆする色くの虫	桃先
日われ戸にいくつも月の影落ちて	探水
今朝を答めと分る鳶丸の葉	白雪

取繕	ろひて	麦手	あや	つり	楓橋
呪師子	に	緇付	廻る	あれ	社
其日	をか	たる	比丘	尼	猿引
思ひ	そ	や	口	から	口に
禱	に	枕	を	防	く
漸寒					
月に	潜	船	の	匂	ひ
の	打	し	め	り	
了	と	ち	さ	そ	く
岡	の	芥	江		
花	に	来	て	茶	囉
ひ	に	や	る		麿
また	ほ	こ	と	野	を
焼	し	跡			
清書	を	手	の	あ	か
れ	と	や	帝	鳶	
雪					
十	良				
丸	硯				
梅	列				
梅	志				
棘	士				
七	曲				
扇	車				
白	紙				

(大東原文具チエーン特製)

刺	刀	あ	こ	せ	小	坊	主	に	せ	ん	士
袴	着	て	傾	城	所	に	行	心			先
色	も	こ	の	め	と	鉄	鎚	の	尺		後
廿	年	酔	通	し	た	ら	何	佛			丸
中	葉	作	り	て	見	た	る	生	垣		鯉
脱	捨	し	袷	羽	織	を	持	て	こ	い	之
女	の	駕	籠	に	め	さ	る	雉	の	子	水
伽	羅	の	香	の	も	し	や	こ	ほ	れ	て
お	ほ	ろ	月								橋
新	都	は	い	また	花	も	く	ろ	ま	す	芦
鷹											車
あ	つ	ら	一	菱	の	無	形	に	店	屋	餅

瓶ツリヒクと小は顔のちいさき紙シヤク

着こゝろや手前紙山の棲モミかけん棘

柱杖ツチバネの跡をつけし初雪硯

なせ鳥羽に片よせたてぬから車列

半分土にまじる蛤蜘蛛志

鏡の間の次に井筒の有所良

羽をしごかねと飛戻る露曲

四日白雪白袋手を取て

鳳来寺ゆにのほり亀毛子こかたる轍ワグ士

茂りあふ木の間に軒ノや坊の軒轍ワグ士

(大東文具チエーン特製)

鐘に散チヨク也チヨク卯の花の庭藤本院フジノイン亀毛

降雨レに難チヨクはおやにつれたちてチヨク心的

終日藤本杉本にかたりて嵩山の

縁起ツキ方カタと同書と、め山の方角

祈ノリいの古跡こまかに繪圖にとりて

極ツク樂ラク景ケイ忘れかたく帯に見たのしむ

煙巖山鳳来寺勝岳院文或天皇御願之場堂社二十余宇

天台真言坊舎二十有余知行千三百五十五石

一開山利修仙人ハ山城国端正郡二葉ノ里高賀

茂之老翁間質之助都岐麻呂ト云人ノ子也婦
 人瑞夢金人來ヲ口ニ入ト見テ懐胎ス欽明天
 皇御宇^{庚寅}年四月七日午刻出胎ス利修童子
 ト名ク成長而後忽然トメ此山ニ來ル有時夢
 中ニ五臺山ノ長秋仙人來テ仙術長生ノ法ヲ
 示ス^云利修三百九歳ニメ入定ス此所雖有
 池水凡夫ノ非所^ニ行ク有縁者時々鈴音ヲ聞ク^云
 煙巖山ハ仙人入^ニ岩窟護摩ヲ修シ玉ノ煙巖ニ
 付テ号^シ煙巖山ト鳳來寺ハ齊明天皇ノ比仙人百
 千國渡玉ノ飯朝ノ時乘鳳來玉ノ又文武帝有

（大東家文具子エーニ時型）

御惱勅使草鹿砮公宣郷ヲ以テ有^レ召^レ仙人ヲ仙人
 乘^レ鳳^ノ參^内ニ玉ノ故佳名賜^ニ鳳來寺^ニ云^ク
 一佛閣草創文武天皇御宇大室^卯年祿五年^ヲ九百
 九十一年ニナ^ル
 一本尊ハ一刀三礼藥師如來利修仙人ノ英作也
 一當寺ノ額聖武皇帝后光明皇后御筆ニ玉門今
 ノ額是也
 勅使公宣郷之詠歌
 霧や海山のすかたハ嶋に似て浪かときけは
 松風の音

風涼し かれ涼し かれ風	髭刺て 又見 にこ うそ 杜若	つよ くと めら れ	文と くろ 事有 てか けも くれ は	同五 日同 列五 府白 井氏 梅可 かた へ	夜着 ひと つ祈 り出 して 旅寝 哉	は せ 改	夜寒 を芳 るあ した	山に ちや り卧 具か りも とめ て	くれ 麓の 門谷 に一 宿白 雪心 して	一と せ芭 蕉け 山に のほ りて 月を
--------------------	-----------------------------	---------------------	---------------------------------------	---	---------------------------------------	-------------	----------------------	---------------------------------------	--	--

梅可

轍士

薄月に薄うなる茶を入替て

露おく窓の重う引た

むら鴉霧より分て一黒

（和）月和定めて出すかけ舟

痕落は万度の抜戴かん

口きくなとて力又せけり

唐人の笠吹破る富士瓦

放しそこふし矢恥かし

酔さめに又ニ三盃うち喰ひ

形にも似せぬ華博劣か恋

夜白

如風

加今

筆

可（和）

士

凡

白

士

今

（大東亞文具チエーン特製）

若衆に初尾たのむ薬師堂

腕さすらせて相撲取分

池水を救へは月の影にほり

馴ては鹿の傍に起卧

かな山の比さく花を身に甚^甚て

目算したる白長閑也

同列淨樂寺夜白御馬の濱に

誘れ出るけ絶景誰かれにも

見せたい西南の隅伊勢の

海つ、さ船路二十里にたふ

白

可

今

凡

可

士

三十七

(大東京文具チエーン特製)

右は塩たると海人のいとなき

しけく左は大松原午頭天王

の宮たち拝まれ給ひてかうくし

松風塩風吹いた水面白さこゝに

尽ぬ

轍士

三十七

浦涼し御坊も塩を午傳ふか

蛸からにうく生海松の色

悲る月に帷しほり打うて

片隙明はせにし茶による

夜白

如風

錦袋

三十七

有やうにいはぬもの人の歳

如今

実穂にしたる庭の柿木

曉昔

戸を開く小社の中ウの力なき

白

媒やめて抱もつかはや

士

恋中一にかこに習ふ藪薬師

袋

うたふ小哥の巻はなまらし

凡

思ひ切位は田舎も住れけり

荏

面のニ子の名乗來る

今

呑出せは十日も酒にすぶつかり

士

寺歇栲かて月見せんとよ

袋

かいくらむ時には叔の白仕廻ふ

凡

大組板にさひ點の暁

白

いかめしや花に先祖の幕の紋

今

尺の長きを藤の撰賣

雀

七十九才

猶東のかた一と思一と漸夏の空

暑をくるしめぬは先洛陽に出人と

伊勢のかたに行岡崎と池鯉鮒と

の間松はらうの端に業平と杭に書

て外の文字ハ見之すかゝる人の

名をあらけなくしるせしハけに

まこと
なりひらと
枕に書たり
杜若
伊勢

松坂に一宿
神前に急かん
と夜をこめて
出る明星が
茶屋過て
明野か
はらとては
てしなき
芝原有し
はし
休足の
うち
頻りに
ねふけ
つきて
頭陀枕に
し
笠面に
引覆
ひ
霄の
あしろ
のせ
は
きに
足
ミ
しか
し
と
う
ち
の
ひ
ま
臥
ス

西夏の身
往来の人よ
錢投な

(大東京文具子エーソフ製)

山田寛後
老沼氏
近志か
たに
尋入て
は
との
つか
れを
休む
詠師
斯波一
有か
たよ
り
消そ
くして
連象
詠
し
か
ま
し
水
い
う
す
夫
婦
と
三
吟
せ
よ
と
て

あたらし
く
そ
海
蘭
織
ら
は
や
あ
ら
造

け
水
涼
し
足
ら
か
ら
吞
か
ら
轍
士

朋
骨
の
瘡
に
腕
を
お
し
曲
て
一
存

荷
石
車
に
三
里
寝
て
行
と
の

狼
を
飼
后
つ
け
た
了
月
の
前
士

その

何作るに秋世よかれと

存
し
て
い
や

山^ウ上の土臺くはりに薄紅葉

その

持佛の燈昼も明ら

士

よめぬ字を人によませてうち眠り

存

茶碗^碗わりた子をもしからず

その

今結し髪^髪のそこ^{（おかしき）}の恥かしく

士

爰深祈るけうこつな壺

有

酒杜氏^{スイカ}葱^{スイカ}取に朝出て

その

右御太儀と立て行雁

士
し
て
い
や

日の中は幾所にも月の影

有

人におしまぬ露のはら〜

その

さく花に頬すり當る馬の上

士

樛^{（あま）}の着芽^{（あま）}蜀羊^{（あま）}くさよ

有

茶^ナの戸ハ春の樂疲も角ちかひ

その

凡鈴の錢て酢を買に行

士

息はかり欠てもやすまぬ恋心

有

文を鏡によはす武者ふり

その

汐かつく何盃ぬるむ市茶なるや

士

刷毛の跡より粘かいく夜

有

蟬の色照らわて鳴か哀え

その

（大東京文具チエーン特製）

さくり也足する態野遊道 士

首筋の白しとさやかれ 有

と是は君にもカま君にもカくま君にもカにもほめらる舞 どの

かいらけを枕に碎り今日の月 士

藏所の縮ハ木の股にかけ 存
LETTER

ころくの河原川に出にけり どの

凡雅になまけく風豊え 士

へかに岩花の埃とつきすて 有

またの弥生も入らん木香の湯 どの

廣くと野に欠たるこそ蝶胡蝶 士

（大東京文具チエーン特製）

春の袋ハ筆と硯と 存

哥仙満て首足は知らすうち臥たる

に統甫凡角はほとよふは沙汰せぬ

其恨こよひハ寝かせぬとやらいふ

て

統甫

露の葉やたはこ包て枕本

短かい夜も油一次 梅

はらくと扇三味線かき撫へ 凡角

大脇指を壁にたてかけ 甫

山蟬よきのふ其角ハ通うぬか

士

レ三十五

にも法師が事おもひ出て

我が輩の通路ならんとなつかしき中

鈴橋を渡りて山際レ三十四を行に物寂し誠に

んに止(廻)水とて常の道をゆるさす五十

十四日内宮へ参るに僧尼の諍とやら

御馳走や濱萩の軸ぬほと、さす 士

とせめられ

山田が原より子規鳴つる、弄句レ三十五

分入漸十平はかり又出しける折ふし

に成たらんに土産に送らんとて二人

かりレ三十四数手にてまとひ置たりかれ枝

軸にせんとして中にも太き萩の根をは

所はかりかけよる一有兼て萩を筆の

山田が原のつゝき濱萩のある所一

夏海や御潮忘れて沖の方 士

一日一有誘引ニ見に行

薄を振レ三十五化しもの腕 角 士

朝月や旂の國レ三十五のうそくらき

大東原文具チエーン特印

内宮奉納

青簾かゝる所へ参りたり

外宮

ゆるゆるに名を

とらめ給へ

諸国銭別

梅ハ浪花の家に置て心かるさハ

行脚の様あやしや麻たくハ

轍士出るハ我

(大東宮文具チエーン特製)

うかれ出て津輕に寝るか朧月

山城

言水

おつとつて五畿内の花うら山し

常牧

さらしなの月丸山のおほろ月

春澄

嶋蒜アサギや所ノの蕎麦を喰ハへ

十春

ものもたてて荊の若芽道安し

定之

三子

のとかたに東おくとや馬の顔

方山

江列

勅命にて朝日山と云茶園あるに

字列 流のこに茶摘て行ク朝日山

月野 白梅

轍士日野に入は我は有馬に入

日に幾たひ足戻る跡の西段哉

和三

之れ和歌の道筋つけぬ春の原
 白黄
 歸厂さへ残るもあを花の下
 蜻蛾
 よい比を伊勢路あたりの邊様栞
 蘭室
 今日日歌陀隠さはや花の旅
 祇福
 見送るに其程晴よ山かす足
 淡室
 帰るとも忘るな鄙の山櫻
 柵水
 春草の筋な違へそ田舎道
 柵祭
 鳴雉母にまきうかしてそ別れける
 重好
 日は永し足か痛まは牛に入れ
 鐘明
 いさともにも水なふりせん春の海
 彦根不障

(大東家文具子エーン特製)

なを足送らんとして寝物かたり近三毛才
 うかれ出によきくと轍か行を
 又了に山伏とおもへは斗撒かけたり
 又出家かとおもへは大念こつけにいて
 右の手にかはやくあす
 喰もて行
 極樂のものにならすよ木蓮花
 抗漱
 雲別
 美憐
 也よとす水先行春の其分よ
 芦本
 陀念ふ猶散か、水山さくら
 雪水
 三月尽風来寺へ越玉ふに

三河

足るやうに明日の御坂や衣かへ

よし田

二徳

三十七

豊水

他子を行て不逢猫跡よりしたひて
心つめひて

身の軽さ袷やりたし旅の人

葵白

ほと、きす又一二急はいつ水の日

小坂井

膏車

ま水人に蠅のうねるさくつきにりり

吟松

青柳の根に取付し川の蜷

心川

明日日からは櫻を夢に足る計

井ノ保

万水

(大坂京文具チエーン特製)

甚姿よて神前へは叶ふまい

新城

三十九

宮川て男形せよ花あやめ

芦鷹

八橋は寺に清座るそ杜若

七曲

我息を着葉に隠す別れ哉

桃先

馬によくめせ山道そほと、きす

棘土

かきつはた馬に喰せよ今しはし

雪丸

足送りて櫻にのほる心哉

探水

炎暑をくるし玉へは先

京子出んとや

夏中ハ足をひやすが紅川

白雪

七十五

卯の花とうちつけなから泪哉

桃後

ひきぬ足子濁す夏川

轍士

白雪か子十二歳の即興之餘に艶しく

是こ脇に及ひ

十徳の徳は 枕子残

国村

捨はこその交夜多にか勢

梅可

夏の夜やねふけもさ、ぬ郭公

御馬

錦袋

蚊の喰た跡を形見と御覽せよ

如凡

短か夜の之しかい心もたしやるな

夜白

けほとうちつきたる舎と問たれは

三十一
10-20

(大東京文具チエーン特製)

次頁へつづく

何ぞ心なくさむ事を真侘ふまはにと
手をとつことむれしとまり玉のす
去とてはわたちと、めよ若楓
御油
泥蓮子

長明か記にもおそろしきもの
隠れかくれとす

勢列
ねふたくと清水な唇を横田山
その

朝月にあの若葉えよくの木原
風角

五文字や指かえへけりけと、ます
近忠

旅衣涼しそうにも破れたり
一有
轍士雅丈者風流佳客也高色夷洛忍譽

(大東家文具チエーン特製)

詞場一日予共會一有俊士の家頗彌
志矣頻仰素聞期勝會賸故園之別日
夕月重俄然聞別離予不堪愁腸綴一
韻餞別余云

梁文代百拜

詞林獨歩一才人談咲閣、勝會新爐下忽驚
明且別添油灯盞教怨春

十四才

元禄
五
年
甲
午

晚
夏
日

寺
所
二
条

井
筒
屋
庄
兵
志
板

(大東原文具子工一の特製)

